

どうわ 童話サークル「木の芽会」さんによる

創作童話

『ヤゴ救出大作戦！！』

え・ぶん 三井 もとこ

ぼくのなまえはマモル、4年生。きよねんの6月、おばあちゃんにつれられて近所のプールでひらかれた「ヤゴ救出大作戦」に参加することになった。ぼくは、帰りにソフトクリームを買ってもらって約束で、しぶしぶついていった。(ヤゴってなに?)

おばあちゃんは、大はりきり。開会式の後、いよいよ開始。そーっとプールにはいってすくい上げると、あみにどろやはっぱがはいった。

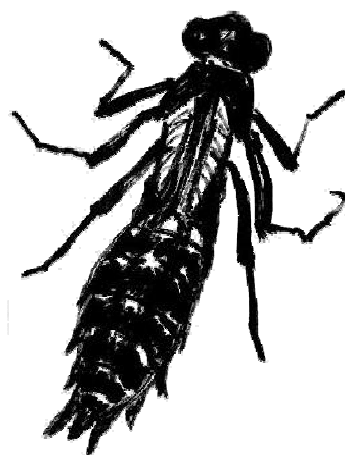
「なーんにも入ってないよー。おばあちゃん！」

「どれどれ、みせて。あーいたいた。ほら、これよ。これがヤゴなの。トンボの幼虫」

「えー？これがヤゴ？トンボのこども？ぜんぜんトンボと形がちがうじゃん」

ヤゴはぜんぶで13匹とれた。これがほんとにトンボになるのかなあ？

まいにち、えさをやってから学校へいった。ヤゴはいつもじっとしていて、どこに行ったのか見つからないときもあるんだ。葉のうらにかくれていたり、脱走してお父さんの靴の中に入っていたことも。まるで忍者だよ。赤虫を食べるんで、目の前に入れてやると、ジーとねらいをつけて、パヒッとつかまえて、ムシャムシャと食べるんだ。



えさをうまくキャッチできるヤゴは、堂々としていて、カッコいい。

「わーっ、すごい食欲。こんなによく食べてくれると、かわいくなっちゃうわねえ」とお母さん。

「ほら、たべな。ポーっとしてたんじゃ、大きくなれないよ。好ききらいしないの！」

とぼくが、ヤゴに話しかけていると、おかあさんは、かならず

「そうよ。マモルもこんどからピーマン残さないよね」

という。もう！！

1週間すると13匹いたヤゴは、7匹になってしまった。ポーっとしてたひ弱なヤゴは、強いヤゴに食べられちゃったんだ。おかあさんがいった。

「マモルが3歳のころ、カマキリのたまごをお父さんがみつけてきてね、庭に枝ごとさしておいたの。そうしたら、ある日うじゃうじゃ、うじゃうじゃ100匹もカマキリの赤ちゃんがでてきてね。ほんの1センチくらいなのに、本当にカマキリの格好をしているのよ。マモルは、ジーっとみてた。そうしたら、目の前で赤ちゃんカマキリがほかの赤ちゃんカマキリを食べ始めたのね。マモル、なんといったとおもう？」

『こら、マモのおともだちをたべるんなら、じぶんでじぶんをたべなしゃい！』

っていったのよ。お母さんは、なんて哲学的なことばだろうと思って、感動しちゃったあ。3歳でそんなこといったのよ。マモルは

(へえ、そうだったんだ。ぼくって将来、哲学者?)

2週間自、大きくなったヤゴが、何も食べなくなった。ただ、じーっと木の枝につかまってることもある。ある日、ベッドのそばで、

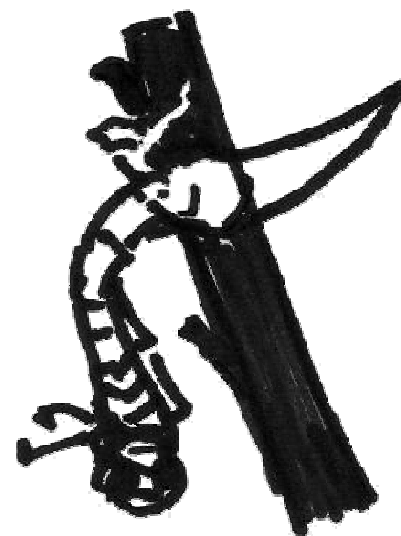
「もうすぐ羽化するぞ。起きろ！」

というお父さんの声がした。お父さんと会うのって久しぶり。だけど、夜中の2時だよ。ぼくは、目をこすりながら起き上がった。あれ〜ヤゴが逆立ちしてる。

ヤゴは、枝につかまって、背中の割れ目から、すこすこ体を出してきて、しっぽのどこだけつながってる状態で逆立ちしてたんだ。しばらくじっとしてたけど、そのうち手をバタバタさせてすっ

ごい腹筋力で起き上がるとじぶんのぬけがらにつかまって、ぶら下がった。背中のとこにクシャクシャになってくっついてた羽が、だんだんだんだん伸びてきた。すきとおった緑色の羽だ。羽がピンとなったときは、もう4時だった。それから、両方の羽をひろげて、水槽に立ててある枝からカーテンまでよじ登って、じーっと動かなくなった。ぼくは、夢中で絵を書いた。お父さんが、「はじめてみたよ。きれいな羽だなあ。こどものころはよくトンボをつかまえては、羽をもいであそんだんだけど・・・一匹、一匹が、こんなにがんばって、生まれてきてたんだなあ。感動するよねえー」

なんていってる。(なんかじゃないよ。すっごくワルだよ。ひどいなあ、お父さん)ぼくは、もう目がさえちゃって眠る気なんてしなかった。お父さんがこどものころの話をしてくれた。秋の夕方、荒川の土手にあがるとアカトンボが何百匹も飛んでいて、顔にぶつかってくるくらいだったとか、蛇をみつけて手で捕まえたこととか、



四手あみでテナガエビをとって、泥んこだらけになってあそんだこと。ぼく、お父さんとこんなに長く話したことがないような気がした。

外が、うすぼんやりと明るくなってきた。真っ先にかわいい小鳥の音がした。それから新聞やさんの自転車がキーっととまった。コトと新聞をポストに入れる音。6時には3人で、朝ごはんを食べた。

「羽がかわいてきたら、外へにがしてあげるんだよ。生きたえさしか食べないんだから、かわいそうだからね」

とお父さんがいって、会社へ出かけていった。お母さんもパートに行く準備で忙しそうだ。ぼくも学校に行くしたくをした。出かけようと思っ

て、ふと見ると、さっきの場所にいなくなっている。羽がかわいて飛べるようになったんだ！ぼくとお母さんは、二人で決心したように、窓を大きくあけた。トンボは、窓からとびだすと、一度家のかべに止まって、それから大空へと飛んでいった。

「お礼を言いたくて、一度とまったんだねえ」

ぼくは、あの日のことを一生忘れない。

おわり

